

博士(文学)学位請求論文審査報告要旨

論文提出者氏名	宮本 明子
論 文 題 目	戦後小津安二郎直筆資料群からたどる映画成立過程研究
<p>審査要旨</p> <p>本論文は、国内各所における一次資料の精査、さらに関係者へのインタビューを通して、小津安二郎監督作品の成立過程に迫るものである。具体的には、制作にあたり小津自身が記したとされる草稿やメモ、絵コンテ、加筆修正入台本などを対象として検証がなされる。調査場所は川喜多記念映画文化財団を主として、松竹大谷図書館、国立国会図書館、早稲田大学演劇博物館、鎌倉文学館、個人宅など複数に及ぶ。標題の「小津安二郎直筆資料群」とは、これら国内各所での調査から確認された資料の総称を指す。</p> <p>従来、小津をめぐる言説の多くは、かならずしも一次資料の綿密な考証を経てきたわけではなかった。一次資料の所在も明らかでないことが多く、所蔵先も異なっている。このような状況から、本論文では、まず資料の所在や点数、内容を確認し、これらを精査する手順がとられている。ここにおいて、複数の資料を丹念かつ一定の精度で分析し、初めて公開しようとする点に高度の萌芽性・新規性・独自性が認められる。また、第一章に代表されるように、映画準備稿に残された加筆修正の痕跡の比較検討を経て、これらを映画と比較検討する試みもなされている。つまり、単に一次資料のみを検討するばかりではなく、映画、文献、関係者へと問題意識は向けられている。</p> <p>このような方法を用いて、従来は具体的な協働の様相が明らかにされてきたわけではなかった作家・里見弴とその著作の、小津の映画との具体的ななかかわりを指摘している部分などは、日本映画史・文学史に新たな事実を提供したものとして高く評価できる。一方、これらの一次資料調査から得られた情報を、より多くの小津の作品も対象として、従来の小津研究、日本映画研究にどのように位置づけてゆくのが今後の課題となることが提起された。また、本論文が対象としているのは、全直筆資料群の中でも比較的現存する点数が多く、同じ版が複数確認できるために相互の比較検討が可能であるとみられる戦後のものである。他の年代においてはどのような特徴がみとめられるのか、ここで用いた方法論を応用してどのような結果が得られるのか、今後期待される。</p> <p>具体的に各章が対象とする作品、および考察される事柄、また以上について提示された論点は、以下の通りである。</p> <p>第一章では、映画『早春』で使用された一連の撮影前台本を調査し、そこに青鉛筆で「里見さん」と記される人物による加筆修正の実態を探る。以下各章へと続く研究の基点として、映画一次資料と映画との繊細かつ魅力的な問が提示されている。たとえば、「里見」といえば、小津がしばしば「手本」としていると語っていた里見弴が挙げられるものの、なぜその里見が手を入れたのか。さらに、完成後はほとんど修正が入らないとされてきた小津の映画の台本に多数の修正が施され、このうち複数が映画に採用されているという実態をどのように位置づけられるのか、ということである。既存の文献調査から判明しない部分についてはインタビューから教示を得、並行して里見の直筆調査を行い、慎重に裏付けと考察が進められている。第二章では、以上を元に、上記準備稿の加筆修正者と推定される里見弴が参加した、他の映画・演劇・ラジオドラマ台本における加筆修正の有無について調査がなされる。結果として上記『早春』のように大幅な加筆を行ったとみられる事例は確認できないことが提示されるものの、その事実を提示し、今後の研究のために新たな情報を提示した点が評価できる。続く第三章以降は、一次資料にも留意しながら、各作品の分析に主軸が移る。この点で、各々興味深い観点を提示しているものの、本論文標題との一貫した整合性がやや弱いという指摘がなされた。これは本論文でも言及されているが、上記『早春』のように一次資料に明確な映画成立過程の痕跡を示</p>	

氏名 宮本 明子

すものは限られているとしても、再考の余地がある。また、第三章以降に提示される小津の映画の「原作」との対比は、今後研究を発展させるために、映画と「原作」とのかかわり、そもそも「原作」をどのように定義するのかなど、議論をより掘り下げる必要性が指摘された。しかしながら、第三章でなされる『晩春』に引用される能楽「杜若 戀之舞」が用いられた経緯や、金春流宗家、金春惣右衛門へのインタビューなど、既存の評論・研究では未だ十分に論じられていない部分に光をあて、答えを提示している点は高く評価できる。続く第四章では、『宗方姉妹』（1950 年）、『彼岸花』（1958 年）、『秋日和』（1960 年）を対象に、戦後の小津の映画の特徴としての、（結婚をめぐって提示される）「嘘」、「娘」について考察がなされる。さらに第五章では、里見の著作との対照により、映画『彼岸花』、『秋日和』における里見の著作からの複数の引用・展開の様相が示される。いずれも、『早春』の場合と同じく、従来認知されてきた小津の映画の特徴とされる「小津的」なる世界の特徴、さらにその映画的な着想の源を明らかにしている。これらを受けて、以上にみる一連の戦後小津の映画が、『彼岸花』、『秋日和』を除き原作者が違うにもかかわらず、作品の傾向が一貫しているのはなぜかについて、明確な答えがほしいという意見が出された。こうした様式化がたとえば小津の作家性に帰するものなのか、それとも小津・野田という 2 人のシナリオライターに帰するものなのかなど、より深い議論の展開が求められる。また、第五章に具体的に示される小津の映画にしばしば引用される里見の著作が、小津の映画の軽妙さと関連しているとするならば、それは小津の戦前の作品の軽妙さとはどのように相違し、あるいは類似するのかが問われる。

審査においては以上のように、各々の成果、課題が明らかとなった。

これらを受けて、従来は映画の分析や既存の文献を主として多くの議論がなされてきた映画研究、および小津安二郎研究に対して、本論文が新たな視点を提供し一定以上の成果を生んでいること、さらに、小津の映画の一次資料を各所で丹念に精査し、分析を重ねた過程が高く評価できることについて審査員全員が一致した。各章で提示された視点は相互に関わり、研究の問としていずれも魅力的であり、研究という場に限定せず、一般にも広く提供されるべきものとして評価できる。

本論文が今後の課題を残しつつも浮き彫りにした各事例は、今後の国内外の映画・文学研究に大きく貢献するものといえる。今後はさらに議論を発展させるべく、必要に応じて理論も援用しながら、以上の課題を達成することが期待される。さらに映画製作に関わる膨大な文献資料は、未だ大半が手つかずのまま残されている。これら資料の劣化・散逸や関係者の高齢化も鑑みれば、今後の検証作業も重要な課題として求められるところである。

以上から、本論文を博士（文学）の学位を授与するにふさわしいものと認定する。

公開審査会開催日	2017 年 7 月 7 日			
審査委員資格	所属機関名称・資格	氏名	専門分野	博士学位
主任審査委員	早稲田大学文学学術院・教授	小沼 純一	音楽文化論、音楽・文芸批評	
審査委員	北海道大学大学院・教授	中村 三春	日本近代文学、比較文学、表象文化論	博士（東北大学）
審査委員	早稲田大学文学学術院・教授	十重田 裕一	日本文学	博士（早稲田大学）
審査委員				
審査委員				